



脳性小児麻痺

齋藤文雄

いわゆる小児麻痺とふつういわれているのは急性脊髄前角炎、すなわち脊髄性小児麻痺ともいっている病気である。これは四肢の弛緩性麻痺をきたすが、ふつう知能障害はおこさない。身体が不自由なだけで知能はふつうに伸びる。肢体不自由児といわれているものの大部分はこの病気にかかった子である。これと混同されやすいが一方に脳性小児麻痺がある。手足の自由も大なり小なり束縛されるが、同時に精神発達も阻害される。

この病気は何が原因で起るか。血族結婚などの場合には遺伝的な要因も考えられているが、それよりも多いのは妊娠分娩との関係である。妊娠中に、トキソプラズマ症、風疹、梅毒などにかかるると胎児の脳に影響がくる。さらに母体の極端な栄養不良、レントゲンなどのたびたびの照射も影響がある。胎児の発達過程中、脳に奇形ができて、それが原因となることも考えられる。さらに分娩時の障害、すなわち無酸素症、頭蓋内出血、溶血性黄疸（血液型不適合が多い）などの

ために、生れてから不幸な脳性小児麻痺をおこす。無酸素症や頭蓋内出血は未熟児にことに頻度が高いから、未熟児では脳性小児麻痺をおこす可能性も高いことが知られている。出生後でも脳炎、脳の外傷などで脳性小児麻痺にかかる子もいるわけである。

結局脳性小児麻痺にかかるると精神発達は多かれ少なかれ障害を被るから精薄児という烙印がおされる。こういう子どもが、現在推定四十万人日本にいたるといわれている。こういう不幸な子どもの病気は一日も早く、あとを絶つところまではいかないとしても減少させなければならぬ。ところが皮肉なこと医学の進歩に伴って脳性小児麻痺は増加している。前述のようないろいろな原因が妊娠分娩、その後の経過の間に子どもの脳に打撃を与えるのであるから、その原因除去にはおおいに努力しなければならぬのは当然であり、その方向に進んでいることもたしかである。しかしながら、医師は子どもの生命をおびやかすその刹那刹那の病気なり障害なり

の除去に骨をおる。明らかに脳障害を起したと考えられるような無酸素症、頭蓋内出血などが診断され、将来脳性小児麻痺出現の可能性が十分であると認識したとしても、医師自らの手でその子を死に導くような治療はおよそ考えられないことである。何とかして一刻も早く、その子の生命の危機を脱せしめたい希望のもとに万全の治療を試みる。この万全の治療という治療方法は近年、年とともに著しく進歩した。昔なら助からなかったであろうかすかすの出産前後の病気で、今では子どもに死の転帰をとらせることなしにすむようになってきた。たとえば未熟児でもそうである。未熟児は体重が小さく生れば生れるほど頭蓋内出血も起しやすい。生下時体重一キログラムの未熟児でも今は助かる可能性が多い。精薄児を作りやすい結核性髄膜炎・日本脳炎などにしても、昔なら助からなかった程度の病気が今ではらくに助けることができる。これが医学の進歩というものであるが、そういう脳性小児麻痺なり、精神薄弱なりをおこす可能性のじゅうぶんな子どもが、どんどん助かってくるようになったのであるから、こういう子どもの数が年々増加してゆくことも当然のことである。一見矛盾のようであるがけっしてそうでない。そうになると、脳性小児麻痺のおこる可能性がある原因については、十分な検討とその除去対策がたてられなければなら

ない。あらゆる方面からの予防対策がたてられるのは当然で、現在医師はその方面の開拓に努力しているしだいであるが、さてこういう問題は医師だけの解決は困難であり、一般社会のかたがたにも理解がないと効果があがらない。ことにわが国は分娩の九十%以上は家庭分娩であり、もっぱら開業助産婦の手によって介助がおこなわれるような状態で、万一の異常産の場合、応急的な正しい処置を期待することは困難であるといわなければならず、一般家庭のかたがたにもそういう認識のもとに子どもをもうける覚悟が必要である。

いづれにしても、皮肉であろうとなかろうと、現在では脳性小児麻痺はふえつつある。医学が進歩しつつあるなら、こういう病児の治療にもっと適切なものがでてきていいのではないかと思われるが、まだ申し上げられるような適確な治療法はない。それは脳という組織の特殊な解剖学的所見からいって、いよいよ困難なものに考えられている。出血とか、無酸素症とかでいちど退化した脳細胞は再生しない。隣り近所の細胞で失われた機能を代償させることもはなはだ心細い。ある血管によって栄養分が補給され、酸素が送りこまれる脳のある細胞群があるとす。その血管が破れる。そうするともうその細胞群は他の血管によって代償されることがないからたちまちにして退化（未熟児の仮死の場合など僅かの時間

呼吸がおこなわれなくても、もう脳細胞は退化してしまふ)して、永久の損傷を受ける。こういう事情もあって、現在では失われた脳細胞に活を入れて再生させる手段は考えられていない。ちょうど火傷の傷あとの癩痕をそのまま普通の皮膚に再生させよというのと同じ理くつである。要するに手や足の不自由さを加減してやるのが最大の治療でその根本の脳に積極的な治療を加えうる段階にはまだ達していないのである。

それでは現在の脳性小児麻痺患者はどうしたらいいのか。その対策は医学だけに限極された問題ではない。国の行政、社会的理念と施設の拡充、教育、保健、結局一つの国の文化的な仕事としての発展が望まれるだけである。程度の差はどのようにであろうとも、その子の享受しうるものも楽しい、そして保健的な環境を与えてやるのが現在の最大の贈り物である。こういうことを幼児の教育誌上に掲載するのは当を得たものではないようであるが、多くの健康な明るい子どもたちばかりではない。恵まれない子どもたちも、いっしょに生長しつつかあることをいつも頭の中に入れておいて、どういう場合でもそんな子どもにも協力することをふだんから子どもたちに話しかせてほしいからである。

テレビ眼症。近頃、眼科医の間にテレビ眼症という新らし

い眼病が話題を提供している。要するにテレビの前にかじりついている幼児にみられる視神経の疲労症であるという。セツトの良否にも関係しよう。映像のフィックス、アップの上手下手にも関係しよう。映像と子どもの位置との距離、見ている時間の長さ、いろいろなファクターが総合して子どもの眼を疲労させると思われる。ことに問題なのは、就寝時間がきても寝ない、夜ふかしをする、結局睡眠時間が短縮されることである。テレビ眼症が視神経の疲労でおこるとしたら、その疲労を回復させるのはじゅうぶんな睡眠時間以外にはずである。テレビで眼を痛め、さらに睡眠時間を短くして眼を痛めるとしたら、この現象はうかつに放任できない問題である。

子どもの教養、躰けなどの面から見たらテレビの内容はほとんど落弟であるかもしれないが、保健面からみても実に困ることがある。コミックではあるうが、ザアマス族が鯨は手でつかんで頂かないと味がございませんとばかり、手を拭くこともしないで指で召上って見せたりする。テレビの始めから終りまで子どもに見せる必要はない。早くきりあげる工夫が必要であろうが、親の心がけに期待しなければならぬ。テレビのような暗いところで眼を使った場合の疲労回復には、睡眠以外にビタミンAの補給が必要である。平常補って

やる方がよからう。

幼児の食生活。育児思想が普及、徹底してくるにつれて、乳児期の子どもの健康は著しく改善され、ここ十年間で見違えるほど立派な発育が見られるようになった。その延長というか幼児期の発育もずっと改善され、うっかりすると小学校の児童かと思われるくらい立派な子が見られるようになった。もともと子どもの発育生長の過程が進んだのは日本だけの新しい現象ではなくて世界的な傾向である。どこの国でも子どもの発育はよくなってきている。

この根本には保健的な生活と、正しい栄養の実践という二つの問題が改善されつつあるからと解釈することができよう。ところが幼児期の子どもの正しい栄養という点では、まだ満足できない点がしばしばみうけられる。それは母親がその子の乳児期にあまり力をそそぎすぎて神経をすり減らしたせいもあるかもしれないが、とにかく乳児の食生活ほど力を入れられない傾きが見られるのは遺憾である。

漸くここまで育てあげたという母親の安心感がそうさせるのか、すでに生れた次の子の乳児保育に幼児を顧みらいとまがないのか、それはわからない。

しかし栄養学的にみて幼児期はどうだろう。蛋白質の摂取量、カルシウム・ビタミン等々発育に不可欠の成分の補給に

はまだまだ手綱をゆるめるわけにはいかないときである。ビタミンB₂の欠乏のため口角炎を起したり、偏食のため便通が一日おきにしかない子がきたりする。ビタミンは補っているかという質問に対し赤ちゃんのときは毎日やっていましたか今はやめています、という返事はよくきかれることばである。乳児期には栄養学の理想とするところとその食生活の実践との間にあまりかけ離れた距離はないのが普通であるが、幼児期になると多くの場合、この二つの間の距離のひろがりを見せている。

食生活に対する幼児の自主性の発現、そして偏食、間食等複雑さの加わった幼児の食生活が始まるわけであるが、幼児の食生活に自主性が出たからといって、それを放任しておくわけにはゆかない。それとなく正しい方向に導いてゆく指導性は乳児期にも増して必要となってきた。けっして野放しにはできないはずであるが、しばしば欠陥の多い食生活のまま放任されているのを見る。

とにかく家庭の食生活は嗜好本位のおとな中心のものになりがちであるが、幼児期はまだ乳児期に次いで重要な発達段階にある時期であることを考えて、少くとも月に一回ぐらいは幼児の食生活についての反省をしてみるべきであるし、家庭の食事も幼児のそれに歩みよりを見せるべきである。